

～群れて遊ぶ～

7 多摩川は子どもたちの自然の遊園地

「狛江水辺の楽校」の教育河川構想



竹本 久志
TAKEMOTO Hisashi

エディトリアルデザイナー/狛江水辺の楽校運営協議会副会長
NPO法人多摩川塾/事務局長

護岸整備後に自然回復した多摩川の河川敷は、子どもたちが川の面白さを丸ごと実感できる格好の場所となった。地域の人々の根気良く活動して取り戻したこの水辺空間で、子どもたちはどのように遊び、何を感じるのだろうか。

年間6,000名が集い学ぶ「狛江水辺の楽校」

物事の始まりは、得てして単純なものである。私たちは今、多摩川の河川敷に「狛江水辺の楽校」を開校し、地域の園児や小中学生の自然体験や総合学習支援、自然再生事業などを行っている。2008年度の参加総数は、教師や保護者も含めて延べ6,018名。そして、子どもたちを指導し安全を見守っているのが50名余の市民講師だ。みんなこの街に暮らすオジさんやオバさんボランティアである。

水辺の楽校と書いて「みずべのがっこう」と読むが、校舎や建物があるわけではない。これは「身近な河川の自然を遊びや学びの場として活用し、心身

ともにたくましい子どもを育てていこう」という国土交通省のプロジェクト名で、2009年4月現在、全国で290ヶ所余りの楽校が登録認可されている。

冒頭、始まりは単純なものだと述べた。ことの発端はこうだ。この場所は1974年、大型台風による増水で土手が崩れ、19戸の家屋が流された多摩川決壊の跡地にある。山田太一原作のテレビドラマ『岸辺のアルバム』のモデルになった所と言えはわかりやすいかも知れない。

その後、護岸の整備がなされ自然も回復し、いつしか図1のようにヤナギやクルミの河川林の中を湧水が小川となって流れ、池あり、オギ原ありの変化



図1 狛江水辺の楽校のイラストマップ

……利用するみんなの安全と緑豊かな自然を残していくために「狛江水辺の楽校」のルールをつくりました……

- オートバイや車の乗り入れはできません。自転車は、堤防下の看板のところまで
- サバイバルゲームやきけん遊びはやめましょう
- バーベキューやたき火はできません
- 不法居住や無断キャンプはできません
- ペットには首輪ひもをつけて手放し散歩はやめましょう
- タバコやゴミのなげすはやめましょう
- 草花や木や生きものを大切にしてください。緑豊かな自然をいたわりましょう



写真1 生きものとのふれあい①ヘビ

写真2 生きものとのふれあい②カメ

写真3 生きものとのふれあい③カエル

に富んだビオトープができあがった。こうした環境があれば、誰だって「子どもたちの自然体験の場」と考えるだろう。

水辺空間を地域に取り戻す

ただ当時この河川敷は、休日のたびに近郊他市から何10人ものモトクロスのライダーやサバイバルのゲーマーたちが押し寄せ、爆音と砂塵が舞い上がる無法地状態。何とかこの水辺空間を地域に取り戻そうと、地元の自然保護団体や環境グループに呼びかけて結成したのが狛江水辺の楽校準備会だった。そして、ここでの遊びを止めてもらうよう申し入れたら、水辺の楽校構想に理解を求めたが、「おまえの土地じゃないだろう」「河川は自由使用だ」と、当初はまったく聞く耳を持ってもらえなかった。

しかし2001年3月、多摩川水系第1号の水辺の楽校として国から登録認可が下りると、さすがの彼らも1人減り、1グループが退去しと、半年後には完全に姿を見せなくなった。市民団体でつくった水辺の楽校準備会から、行政と学校も加わった推進協議会へと輪を広げて3年目のことだ。

自然を活用した教育河川構想

現代の子どもたちは、遊びの“時間・仲間・空間”の三問なしだと言われる。しかし、昔に比べて子どもの外遊びや集団遊びが減少した背景には、身近に遊びやすい空間が少なくなったことも大きな要因ではないだろうか。

幸い狛江では子どもたちが自然と親しみ、遊び、学べる空間を確保することができた。ただ安全を確保するため、子どもだけでなく大人も一緒にと断りを入れているが、休みの日にここに来れば誰かがいる。子どもたちは虫を追いかけ木に登り、学校も学年も

関係なく無邪気に遊ぶ。大人はその周りでそっと見守るだけだ。

平日の利用も多い。現在、市内外から30近い幼稚園や保育園、小中学校が訪れ、春のツクシ摘みに始まってオタマジャクシやヤゴの観察、夏の魚取りや川流れ、秋のクルミ拾いや木登り体験、冬の渡り鳥観察や化石掘りなど、四季折々の遊びや総合学習に活用することができる。

このように様々な体験を通して多摩川の魅力を丸ごと楽しむ。これが本校が掲げる「多摩川教育河川構想」である。河川を子どもたちに開放し、世代をこえた交流を通して子どもを見守る。そして川の恐さや面白さを丸ごと体感してもらう中で、川遊びのルールや危険から身を守る判断力、自然を大切にしたいと思える感性などを育て、子どもの健全な成長を応援しようというのがそのねらいだ。

ザリガニ母さんに学ぶ“いのちの尊さ”

以前、こんなことがあった。水辺の楽校が開校して間もないころだ。春の自然観察会に、ある低学年の男の子がお母さんと参加した。その子は生きもの好きというか独占欲が強いというか、みんなに説明するために取ったヤゴやオタマジャクシを片っ端から自分のバケツに入れてしまう。「そんなに詰め込んだら、かわいそうだから逃がさない」とたしなめてもいっこうに聞かない。お母さんも「すみません、いつもこうなんです」と恐縮するばかり。

そのうちにお腹に卵をいっぱい抱いたザリガニが私の網に入った。「まずい」と思い、すぐ逃がそうとしたが「放しちゃダメ」の一声。その子は私からザリガニを奪い取るように持つと、ためつすがめつお腹の卵を見つめていた。と、そのうちに何を思ったのか、ザリガニをそっと池に放したのだ。それだけではない。

バケツの生きものすべてをそこに戻したのである。

彼はザリガニのお母さんが、懸命に卵を守り育てようとしている姿に何かを感じたのだろう。私たちはよく子どもたちに「生きものを大切にしよう」と話す。しかし、その意味する“いのちの尊さ”というものが感じられてはじめて、この言葉は生きてくる。これは家庭や教室で何10回、何100回話しても教えられることではない。やはり本物にふれ、感じるという自然体験こそが何より大切なのだ。

8割の子どもが川でのガサガサ体験なし

本校では自然観察会や環境清掃などの「自然体験教室」と「総合学習の支援」を2本柱に、多彩な活動を行っている。開校5年目の記念事業として2006年、市内の小学4年生243名に自然体験アンケートをとった。驚くことに8割をこす児童が、川で魚を取ったり釣りをした経験を持たないことがわかった。

私の子どもころのことを考えると隔世の感ありだが、無理もない。今の親たちが育ったのは、川が“汚い、臭い、危険”と言われた3Kの時代。まだ「よい子は川で遊ばない」という看板があちこちに立てられていたころだ。川遊びをしたことがない親が子どもを川に連れていくはずもない。

これは先生にも当てはまる。アンケートによると20～40代の教師のうち7割が川遊び未体験なのだ。もっとも先生にも言い分はあって、「音楽や体育の実技試験はあったが魚取りはなかったからね」。ごもともである。

川に不慣れな先生が子どもたちを引率して総合学習をしようとする時、最も不安なのが水難事故だろう。万一のことがあれば教師生活が終わってしまうかも知れない。当然、学校としてもリスクを冒したくない。その結果、無難な水質検査や環境学習の名

のもとでのゴミひろいでお茶をにごすことになる。

しかも水質検査では「川の汚れ具合を調べてみましょう」。環境学習では「どうしてこんなにゴミが落ちているのだろう。マナーの悪い人が多いね」。いずれもネガティブな発想であって、子どもたちに川は汚いもの、川に来るのはマナーの悪い人、というイメージを植え付けるだけだ。これは教育ではない。

「私たちの川がどんなにきれいになったか調べてみよう」「みんなでふるさとをきれいにしよう」。これで充分なのだ。川での体験を通して、子どもたちが大きくなって、自分たちが住む街の川に親しみと愛着が持てるような“ふるさと教育”こそ、望ましいのだ。私たちの総合学習支援には、先生の意識改革も含まれている。

メニューは超冒険コースと超安全コース

本校の事業に携わってもう10年以上たつが、つくづく思う。子どもは川が大好きだ。魚がいる、虫がいる、鳥もいる、野草も咲いている。子どもたちは友だちと一緒にいろんな草木虫魚とふれあいながら、人や自然の痛みを感じたり、思いやったりするやさしい心を育む。

きれいな花や小さな虫を見て「わあ、きれい」「かわいい」と、すなおに感動できる豊かな心。こうした情操や感受性なども、言葉で教えたり図鑑を見せることで養えるものではない。やはり五感を通じた体験の中から芽生え育つものだと思う。とくに幼児期から低学年時にかけての自然体験は、人格形成の上でも好ましい影響を与える。文部科学省が2003年に発表した「自然体験が豊かな子どもほど、道徳心や正義感が強い傾向にある」という調査結果が如実に物語るものだ。

その自然体験メニューだが、東京ドーム5つ分ほ



写真7 川の流れを体感するムカデ歩き

写真8 ライフジャケットを着用した川流れ体験

写真9 ガサガサ教室

どのフィールドを持つ本校では、超冒険コースと超安全コースの2つを用意し、年齢や季節によって使い分けている。幼稚園や保育園など未就学児の場合は、もちろん超安全コース。広くひらけたクルミ村の広場を中心とした散策コースで、四季の自然にふれながら一周して戻ってくると、準備した手づくりブランコやハンモックが待っている。

超冒険コースはそれより遠路をまわるもので、背丈より高いオギ原をヤブこぎしたり、多摩川や支流でガサガサ体験ができる。ガサガサというのは本校の市民講師でもある俳優の中本賢氏が広めた造語で、魚など生きものがいそうな水辺を足でガサガサと網に追い込む魚取り法である。

面白いのは、初めてガサガサ体験をしたお父さんが次々と川遊びにハマることだ。川の汚染期に育ったお父さんにとっても初の多摩川デビュー。それで魚が取れたものだから大喜び。「今度はいつやりますか?」なんて聞かれた日には、してやったりとほくそ笑む。

川の恐さも楽しさも丸ごと教えたい

川での活動で一番強く求められるのは安全の確保だろう。本校ではライフジャケットを着用し、市民ボランティアが安全スタッフとして参加している。しかし最も効果的なのは、子どもたちを何度も何度も川に連れ出すことだ。川には流れの速いところもあれば、深いところもある。どんなふうにも速いか、どこが深いかなんて、言葉で言ってもわからない。身をもって体感してはじめて理解できることなのだ。

川は危険だからと遠ざけるより、恐さも楽しさも丸ごと知ってほしい。身近な川をよく知る子どもは決して危険な場所に近づかないし、一人で行かない。これが事故を起こさない何よりの安全対策だと思っている。同じように、木に登ったり、土手を転がったり、

生きものとふれあったり、子どもたちにはいろんな体験をさせてあげたい。中には「危ないからやめなさい」とわが子を止める親もいる。しかし子どもはこうした遊びを通して基礎体力をつけ、枝ののりでも折れないかどうか、危険から身を守る判断力を高めていくのではないだろうか。

多摩川は子どもたちの自然の遊園地だ

子どもたちにとって魅力ある川とは何だろうか？ それはいろんな生きものがいる川であり、ちょっとした冒険ができる川ではないかと思う。

本校では多摩川らしい自然環境を残すために、人工的なものは何もつくっていない。トイレも水道もない。土手を上げれば7軒ほどの「水辺の楽校応援宅」があって、いつでも利用させてくれるからだ。後から保護者や担任が子どもと一緒に「ありがとうございました」とお礼に出向くことで「困った時はお互いさま」という地域交流が生まれる。子どもにとっても社会マナーを知るよい機会だ。

もう一つ、何もなければ子どもは何かをつくる。先にブランコやハンモックの紹介をしたが、これらはその時だけのもので行事が終われば持ち帰る。ただ、その感触や面白さを知った子どもたちは、仲間と協力して太いクズの茎を枝に下げてブランコ代わりにしたり、枯れ葉をたくさん集めてフカフカのハンモックをつくるなど、すばらしい創造性を見せてくれる。

川ではガサガサ魚取り、電線のない広い河原では石投げや石切り、ヤナギやクルミの林では木登りや虫探し、緑の草原や土手では草花遊びや土手すべり。自然あふれる多摩川は、地域の子どものために最も身近な自然の遊園地なのだ。

子どもたちが集い、遊び、そして地域の人とふれあえる水辺をめざして、どれ、もうひと踏ん張り。



写真4 園児の手づくりブランコ体験



写真5 園児のハンモック体験



写真6 中学生の木登り?体験